■第二章 歴史

玄界灘に面する二丈町は、古代から大陸との玄関口でした。『魏志』倭人伝に記されている伊都国に属し、古くから農耕が営まれ、文明が栄えました。古代の生活形跡や様々な史跡・遺物などが、今なお町内のいたるところに残されています。

藩政時代には、寺沢氏の唐津藩領にはじまり、豊前中津領や幕領、対州（対馬）領に分かれたりしました。

その後、明治時代の廃藩置県によって福井村、吉井村、鹿家村など9カ村が伊万里県の直轄地、その他が中津県の直轄地となりました。

明治22年（一八八九）には、市制・町村制施行で一貴山・深江・福吉の3村が発足しました。昭和30年（一九五五）の3村合併時に3村の境であった二丈岳の名をとって、二丈村が誕生。昭和40年（一九六五）の町制施行を経て現在に至っています。

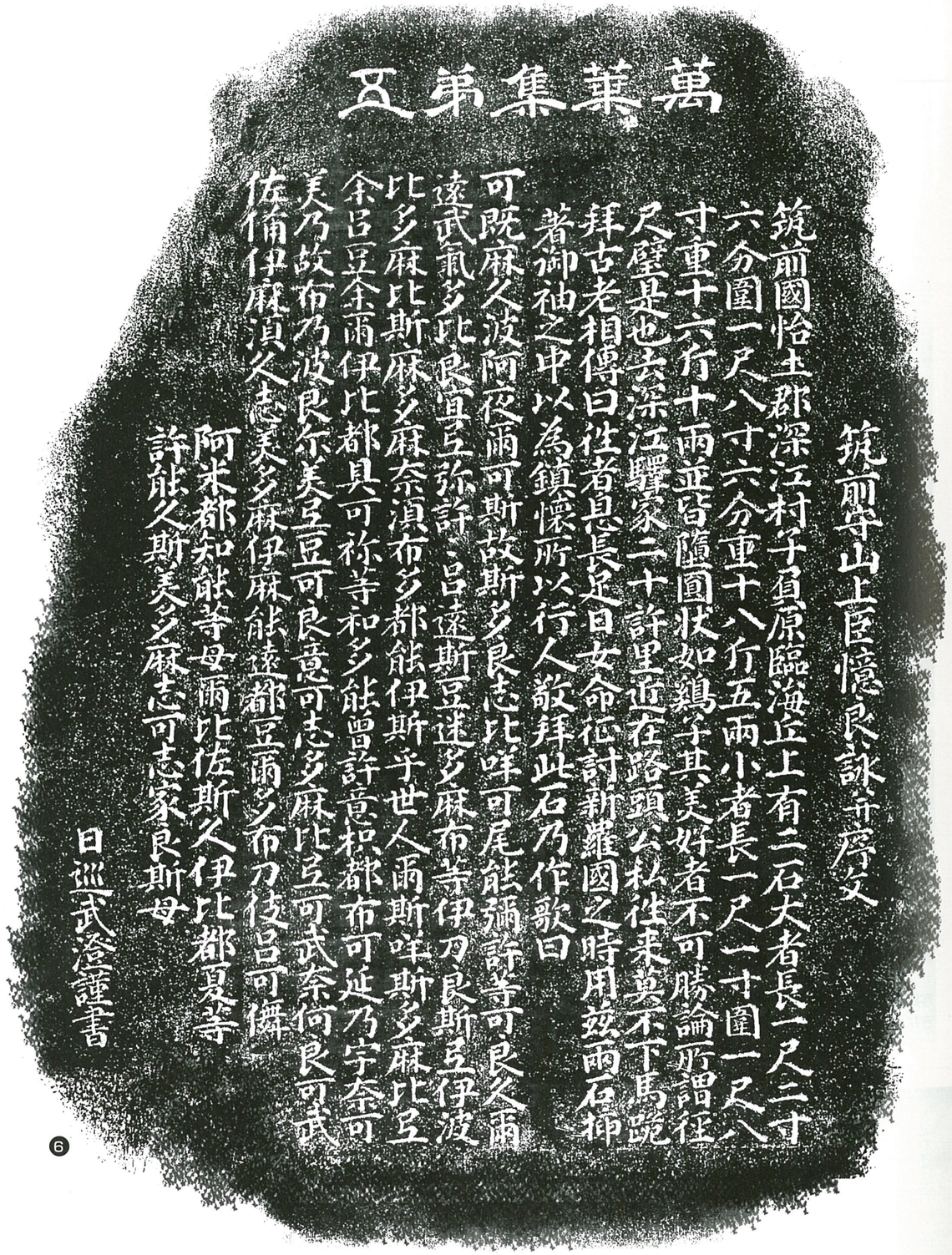
昔の人々の足跡を訪ねる。

写真①　新町延寿院にある中津領藩領石。上部が欠けていますが、中津領の「津領」の文字が読みとれます。

写真②　大入にある藩領石。「従是東中津領」の刻印。

写真③　鹿家にある国境石。「従是東筑前国」の刻印。

写真④　唐津市虹の松原にある藩領石。「従是東對州領」の刻印。ここから東の怡土郡西部9カ村が文政元年（1818）以降、対州（対馬）領になりました。

写真⑤　明治25年（1892）に建てられた追分石。浜窪と松末の境界である羅漢川沿いに建てられています。「加布里道十七町二九間二尺」や「深江駅二七町二六間三尺」などと書かれています。

写真⑥　深江子負原の鎮懐石八幡宮にある万葉歌碑の拓本。歌碑は安政6年（1859）に建てられ、九州最古のものとされています。縦1.3メートル、横1.1メートル。町の有形文化財に指定されています。碑文には、深江在住の中津藩儒学者であった日巡武澄の書とあり、『万葉集　巻五』にある山上憶良の鎮懐石頌歌が書かれています。